vinetur

ヴァンソーブル、AOCで白ワイン生産が認可

白ワイン生産量の倍増を目指すローヌで、ボーム・ド・ヴニーズと村名付き11アペラシオンが官報への最終掲載を待つ。

2026年11月10日（火）



フランスのローヌ渓谷で白ワインの存在感が高まっている。ヴァンソーブルではアペラシオンの名称で白ワインを生産することが認められ、ボーム・ド・ヴニーズと村名付きのコート・デュ・ローヌ11アペラシオンも、同様の生産を可能にする規則改正の官報への最終掲載を待っている。

この変更により、同地域を代表する赤ワイン産地の一部で生産規則が改められる。ローヌ全体で進む変化の新たな一歩でもあり、業界団体は白ワインの生産量を倍増させる目標を掲げている。ブドウ栽培農家や生産者にとっては、新たな植栽や醸造の選択肢が広がり、需要が堅調ななかで地域の白ワイン供給を増やせる可能性がある。消費者の嗜好に合わせて商品構成を調整する余地が広がるため、フランスワイン業界全体にとっても重要な変化となり得る。

ドローム県に位置するヴァンソーブルでは6月、原産地統制呼称（AOC）で白ワインを生産することが正式に認可された。白ワインは既存のアペラシオンの境界内で生産され、ブドウ畑の面積は拡大しない。区画図に含まれる1,375ヘクタールのうち、約50ヘクタールではすでに同じ栽培基準に沿ったブドウ栽培が行われており、生産量は約350～500ヘクトリットルとなる可能性がある。

ヴァンソーブルの生産者のなかには、新カテゴリーで求められるブドウ品種をまだ栽培しておらず、将来のヴィンテージに向けて新たな苗木を注文した人もいる。認可された主な品種は、クレレット・ブランシュ、グルナッシュ・ブラン、マルサンヌ、ルーサンヌ、ヴィオニエ、ブールブランなど、ローヌを代表する白ブドウ品種だ。補助品種にはクレレット・ロゼ、グルナッシュ・グリ、ピクプール、ヴェルメンティーノ、ユニが含まれる。収量は1ヘクタール当たり40ヘクトリットル、上限は44ヘクトリットルに設定された。

今回の認可に向けて取り組んできたドメーヌ・ジョームのリシャール・ジョーム氏は、2026年の生育期は新スタイルの立ち上げに追い風になるとの見方を示した。高温にもかかわらず良好な酸が得られ、ブドウの樹は8月15日まで緑を保ったと述べ、アペラシオンに白ワインが欠けていたという確信を強めたという。

ボーム・ド・ヴニーズでは、やや異なる日程で進んでいる。1945年以来のミュスカ・ヴァン・ドゥー・ナチュレルと、2005年からのスティル赤ワインで知られる同アペラシオンも、白ワイン生産の権利を得た。ただし、フランス官報への措置の掲載はまだ行われていない。地元関係者によると、この構想は何年も前から議論され、2012年に正式に始動した後、長い行政手続きを経てきた。

ヴァンソーブルと同様、ボーム・ド・ヴニーズの白ワインも、赤ワインと同じ600ヘクタールの限定区画で生産される。これまでは、同地で造られた白ワインは、より広域のIGPカテゴリーでしか販売できず、ミュスカ・ア・プティ・グランが使われることも多かった。新規則のもとでもミュスカはブレンドに使われるが、主体とはならない。

地元生産者団体の広報責任者エロイーズ・ブジッド氏は、ミュスカはアペラシオンのアイデンティティーの一部であり、古くから栽培されてきたため、完全に外すことはできないと説明した。植栽面積の10～30％を占め、最終的なブレンドでは5～30％を占めるという。ボーム・ド・ヴニーズの白ワインの主な品種は、ブールブラン、クレレット、グルナッシュ、マルサンヌ、ルーサンヌ、ヴィオニエ。ミュスカ・ア・プティ・グランは赤または白が補助品種として記載され、ピクプール、ユニ・ブラン、グルナッシュ・グリは補助的なブドウ品種に分類されている。

規則改正の対象には、これまで村名を冠した白ワインを販売できなかった、名称付きのコート・デュ・ローヌ・ヴィラージュ11アペラシオンも含まれる。業界関係者は、この状況を歴史的な不整合と位置づけ、解消が近づいていると述べている。ボーム・ド・ヴニーズと同様、これらの村も措置が正式に発効する前に、官報への掲載を待っている。

コート・デュ・ローヌ総合組合（Syndicat Général des Côtes du Rhône）の副会長、ヴァンサン・デサル氏によると、国内異議申立手続きは9月19日に終了した。政令に署名がなされれば、対象となるすべての村に遡及して適用されるという。同氏は、この変更は地域組織内で進められた政治的な働きかけの成果であり、会長のダミアン・ジル氏が主導したと説明した。

ローヌではすでに、ジゴンダスやロダンなど他の産地でも白ワイン生産の権利が拡大しており、今回の認可もその流れに沿うものだ。実際には、長く赤ワイン産地として知られてきた地域で、ブドウ畑の運用に徐々に変化をもたらす可能性がある。特に、ブドウ畑の一部を白ブドウ品種に切り替える商業的な理由があると生産者が判断する地域では、その影響が大きくなり得る。また、地元生産者がAOC規則の枠外で白ワインを造った際、より広域のカテゴリーに流れていた価値を、各アペラシオンが取り込めるようにもなる。

新たに認可された白ワインカテゴリーの初回ボトリングは、2027年春になる見通しだ。一部のブドウ畑では植え替えや規則への適合が必要なこともあり、生産量はまだ不透明だ。それでも生産者は、従来は赤ワインに大きく偏っていた地域の品ぞろえをローヌの生産者が広げるなか、これらのワインにも市場が見つかると期待している。